
ガラス細工

暇人 2 8 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラス細工

【Nコード】

N6816A

【作者名】

暇人28号

【あらすじ】

その話をすると、同情と哀れみの眼を向けてくる。そして僕はガラス細工にされてしまう。僕はガラス細工なんかではないのに。しかし彼は違った。

この話をすると、必ず驚かれる。

その後、触れてはいけないことに触れてしまった様な表情と沈黙が訪れてから、同情と哀れみの眼を僕に向けてくる。その眼は僕をガラス細工へとしていき、やがて割らないように慎重に言葉を選びながら慰めの言葉を掛けてくる。その反応に僕は決まっていっても、気にしていないと笑顔で答えるが、それが余計に気にしているように見えるのか、僕をより一層脆いガラス細工にしていく。

僕はガラス細工なんかじゃない、ガラス細工なんかよりも丈夫で頑丈だ。だから気にしていないと言っているのに、言えば言うほど僕を脆くしていくのだ。僕はガラス細工なんかじゃない。

期待と不安の入り混じった入学式から一カ月が過ぎ、友達とも少しずつ打ち解け始め、これから楽しくなるであろう5月初旬、円になって弁当を食べていると、その話題が出た。その話題が僕に向けられたので、その話をした。ガラス細工へとなってしまう、その話をした。結果は高校生になっても同じだった。僕はガラス細工なんかじゃないのに…

しかし一人だけ違う眼をしている子がいた。その眼には同情や哀れみは一切なく、好奇心に満ち溢れていた。ただ好奇心のみが瞳を埋め尽くしている眼だった。そんな眼をされても僕はさほど驚きはしなかった。かつて、僕はその眼に会っているからだ。

小学生の時に会った、好奇心の眼をしたその子は、ガラス細工を割ろうとした。その子は空気の読めない鈍感な子だったのだ。しかし周りの子が気を使ったつもりなのか、その子に注意をしたらしく次の日から、その子も僕をガラス細工にしてしまった。僕は、そんなに簡単には割れない…

僕は、彼もその子と同じく、鈍感な人なのだろうと思った。案の

定、周りの空気が僕をガラス細工にしていることに、彼は気付いていなかった。たぶん明日になれば彼も僕をガラス細工にしてしまうだろう。

しかし次の日になっても彼は僕をガラス細工にしなかった。たまに誰も彼を注意しなかっただけで、そのうち誰かが彼に注意して彼もその子と同じように僕をガラス細工にするのだろうと思っていた。

しかし一週間、二週間と月日は流れ、梅雨の訪れを感じさせるような湿気の多い6月になっても、彼の眼は変わることはなかった。そして僕も、そんな彼に興味を持ち、惹かれていった。そして今では一番仲の良い友達となっていた。

それから僕と彼は、よく遊ぶようになり、僕は彼がどんな人間なのか分かってきた。

僕は彼のことを空気の読めない鈍感な人だと決め付けていたが、それは違っていた。彼は空気を読めた、ただ細かいことを気にしないさっぱりとした人だったのだ。そして、常に好奇心の眼をしていた。それは何事にも興味津々だからであった。僕は彼のようなタイプの人に初めて出会った。そして僕は求めている、彼のような人を、僕をガラス細工と見ない人を。

夏休みになり僕と彼は、いつも通り遊んでいた。いつものように他愛のない会話と無意味な馴れ合いを交わしていた。そして彼は何気なく言った。

「おまえは幸せか」

その言葉に僕は躊躇した。彼は冗談のつもりで言ったのだろうが、僕にしてみれば、その言葉はあまりに重すぎたのだ。そして躊躇して言葉を失った僕を見ていた彼の眼に一瞬、同情が含まれていた。僕は慌てて笑ってみせたが、同情に哀れみが加えられるだけだった。それでも僕は明るく笑ってみせたが、その眼は変わることはなかった。それから僕と彼は会うことはなかった。

夏が明け、僕と彼は久々に顔を見合わせた。彼は僕をガラス細工にしていた。しかし不思議と心は落ち着いていた。むしろ安心感に包まれていた。その時、僕は悟ってしまった、自分という人間がどんな人間かを

僕は僕のことをガラス細工にしていた。ガラス細工ではないと言いながら、僕は誰よりも脆くて、弱くて割れやすいガラス細工として僕を見ていた。そしてガラス細工となることを誰よりも求めて、ガラス細工になることで自分を守り生きてきたのだ。

そして僕は知り合いとなった人には、必ずその話をするようになった。ガラス細工になるために。自分を守るために。

（後書き）

えゝとこの場をお借りして謝らせて頂きます。当初、この作品は連載として投稿していましたが、私にはまだ連載など無理と分かり、一度小説を削除しました。すいませんでした。さて小説の方ですが、たぶん一番聞きたいであろう『その話』なんです、特に決まってません！読み手のインスピレーションに委ねます！『その話』は勝手に想像してもらって結構です。ではではゝ次回作で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6816a/>

ガラス細工

2011年1月3日19時09分発行